
透き通る水

枕鯨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

透き通る水

【Nコード】

N7684Z

【作者名】

枕鯨

【あらすじ】

肉親の死の真相、消失した兄の行方を捜すため『超人』であり『異端者』の少女、リオーネが真相を探し出す物語。

銀世界の雪解け（前書き）

初めての作品ですので、少しでも目を通して頂けたら幸いです。
「続きが気になる」と思って頂ければとっても嬉しいです

銀世界の雪解け

「ありえない」

一人の男が呟いた。

他の男達も、皆黙っている。

何故なら、誰もがそう思っているからだ。

「ど、どうして死番雪狼しばんせつろうの群がこんな所で倒れているんだ？」

彼等は皆鎧に身を包んでいる。腰に剣を差し、背中に紋章の刻まれた盾を背負っている。

五十人は居るのである。その男達は、ピアズ大陸南部の王国デリアランの精鋭騎士団である。

北部の拠点に、物資を届け、帰還するために再び南下している途中だった。

何故、それだけの任務にピアズ大陸屈指の王国が誇る騎士団が行っているのか。

ピアズ大陸は、万年雪が降る寒冷大陸であり大陸の中間地点には大きな山脈が連なっている。

その山脈に、冬の季節にだけ現れる獣が大きな原因の一つだ。

「一体、誰にこんな事が出来るんだ？」

その獣は大きいもので二メートルを超え、大きな赤い目と一際目立つ二本の牙が特徴と伝えられている。その獣は五、六匹の群を形成し、その群に出会って生き延びた事例は殆ど無い。そのため生態も何も分かっていない。そのため、死神にも例えられている。それゆえか、死番雪狼しばんせつろうと呼ばれている。

死番雪狼は生身の人間達にとっては天敵に近い熊をも一撃で殺す程の力を持っているため、冬のこの山脈を渡る者は決していない。

それだけ危険なために、精鋭騎士団が行っているのだ。彼等でも、死番雪狼の群に遭遇した場合戦う事は考えない。それが当たり前であり、例えば大陸最強と言われる騎士団でも例外は無い。

だからこそ、今日の前に広がっている光景は信じられないのだ。
雪の上には、倒れ伏した死番雪狼が五匹。どれも一匹残らず気絶している。

「死んではいけないとは、どういう事なんだ。いや、そんな事よりこんな事が出来る獣がこの大陸に存在しているのか」

騎士団の隊長のジギルが、目を見開きながら一人で呟いている。
間違いなく人間の出来る事では無い。自分たちが勝てる可能性は限りなく零に近く、勝利したとしてもそれは敵の全滅以外有り得ない。

だとすれば、我々が見ているのは幻なのか。その捉え方のほうが正しいとすら思えた。

「ジギル隊長。あれを」

ジギルは、隊の者が指差す方向に目を見やる。

「なっ……」

絶句せざるを得なかった。

倒れた死番雪狼の群の先に足跡がある。間違いなく人間であり、それに一人だと考えられる。

「ま、まさか…異端者なのか」

今から3時間程前。太陽が真上にある時、一人の人間が歩いていた。

かなり大きい黒のローブを身に纏い、フードを被って歩くその姿はまさしく世捨て人そのものであり、それだけで男か女かを断定するにはひどく難しい。しかし、真新しい剣を腰に差している為、自殺を図りに来た世捨て人では無い事は確かだ。

周りには、五匹の死番雪狼の群が取り囲んでおり、隙を窺うかがっている。

「あ、あの……」

か細い少女の声が発せられた瞬間、死番雪狼の一匹が飛び掛る。

少女の命は今尽きる瞬間であると、この光景を見ていた者は思うだ

ろう。

だが、少女は素早く反応し、繰り出される前足の攻撃を身を翻して避け、回転しながら右肘を死番雪狼の腹に叩き込む。更に、右足で顎を蹴り上げる。

たったそれだけの攻撃には一切の無駄が無く、音だけで威力の凄まじさを感じられる。

一匹の死番雪狼は倒れ伏し、それに怒りを覚えたのか他の四匹が一斉に飛び掛る。

眼前に迫る二本の牙を両手で掴み、右から飛んで来た死番雪狼にぶつけて、踵を叩きつける。そのまま拳で次の死番雪狼の顔を殴り飛ばす。返す裏拳で最後の一匹も吹き飛ばす。

まるで、最初から決められていたかの様に鮮やかに全ての死番雪狼が倒れる。

捲れあがったフードが、少女の顔を晒した。

美しく、端正な顔立ちで幼年期のあどけなさがまだ残っている。

目は大きく濁りの無い光を称える黒色であり、誰が見ても美少女と呼ぶであろう。

だが、この美少女が王国最大の騎士団をも震撼させる死番雪狼の群を倒したのだ。

しかも、腰の剣を一度も抜かずに。

彼女は、一部分以外は完全に普通の少女と変わらず、今の戦いを見た後でも信じられないと言える。

しかし、その一部分は明らかに普通の少女が持っているものではなく、異常と言える。

昇り切った太陽の光が、彼女の髪を照らしている。黒でも金でも無く、透き通る様な水の色をした髪の毛が、きらきらと光を反射している。

彼女の名はリオネ・アルデハイト。「超人」と呼ばれる人間であり、同時に『異端者』として、常人から忌み嫌われる存在である。

彼女は今現在十八歳であり、今に至るまで、その生まれ持った髪の毛のせいでたくさんのお害を受けてきた。しかし、そんなお害に対し常に彼女は笑顔と絶やさなかった。それは、自分を受け入れてくれる両親と、三歳離れた兄の存在があったからだ。ならば何故、今こんな所を放浪しているのか。

彼女が十四歳の頃、突然の様に両親が死んだ。

有力な貴族でもあったアルデハイト家の豪邸は、一夜にして全焼し、まともな遺体の原型さえ留めていなかった。

更には、兄も居なくなつた。兄は、死体が見当たらず、完全に焼失したのか、それとも失踪したのかすら分からない。

たった一日の出来事で、リオーネは全てを失い、自分の一番の心の支えを無くした彼女に当てられたのは、今までを遥かに超えるお害と差別。

自分に対して叫ぶ呪詛の言葉。 投げつけられる石。 彼女は逃げる事しか出来なかった。

どうして、どうして、と彼女は心の中で叫び続ける。 迫害する人々に、呪ってくる人々に、自分自身に、そして世界にさえ答えを尋ねていた。

故郷を追い出され、新たな地方でも同じ様な事があつたが、自分を守ってくれる人によって四年間ひっそりと暮らしていた。そして今から二ヶ月前に、育ての親に別れを告げ、自分の肉親の死の真相と失踪しているのかも知れない兄の行方を捜す旅に出たのだ。彼女の様に、特別な色をした髪や眼を持つ人間を『超人』もしくは『異端者』と言う。

リオーネは生まれ持っていたが、中には途中から変化する人間もいる。

何故、『超人』と『異端者』と二つの呼び方があるのか。

『異端者』と呼んでいる者の大半が常人であり、その存在が悪魔の化身と考えている人たちが忌み嫌って呼んでいる名前、中には国の勢力を上げて『異端者』を裁きという名で処刑しようとする国

までである。世界の多くの国は『異端者』追放を目指している。

一方『超人』という呼び名は主に『超人』たち自身が呼び合う名前であり、一部の国では『異端者』では無く『超人』として歓迎する国もある。

その名の通り『超人』は、常人よりも遥かに高い身体能力を持っている。

そのため中には『超人』たちの人知を超えた力を利用しようと画策している国もある。

『超人』だと一番に判別する方法は、眼または髪の色であり、それ以外の外見的特徴は常人の頃と何一つ変わらず、常人と同じく年をとる。

また、『超人』には特別な能力を持っている者も居る。それらはごく一部であり、元々『超人』なだけで、能力を持っていない者も居れば、能力が目覚めていないだけの者も居る。

リオーネには、特殊な能力が無い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7684z/>

透き通る水

2011年12月25日01時46分発行